

内郷地区における炭鉱鉄道と住宅施設の遺構（宮川沿い）

①概説

内郷地区は常磐地区とともに、常磐炭田内ではもっとも熱カロリーの高い石炭層が存する場所であったことから、早期から大手の石炭採炭会社が相次いで進出した。内郷地区で最も規模が大きかったのが磐城炭礦(株)と入山採炭(株)であった。内郷地区では阿武隈高地の東縁から、北を宮川、南を白水川（後に新川）が流れているが、採炭はいずれも上流から下流に向かって行われていった。石炭層が阿武隈高地東縁の露頭部から 7～10 度の角度で深部へ傾斜しており、石炭会社は採炭技術力を高めながら、資本を投入して採炭や選炭、輸送など、あらゆる面で機械化を進め、掘削していったからだ。

②磐城炭礦株（→常磐炭礦株）専用鉄道内郷 線1[宮川沿い]

宮川沿いに鉱区を保有した磐城炭礦株は明治32年、阿武隈高地東縁の内郷村大字宮字峰根から日本鉄道磐城線（現常磐線）綴（現内郷）駅まで2.9kmの専用鉄道を敷設し、沿線で採掘した石炭の輸送ルートを確認した。磐城炭礦株は明治32年に内郷斜坑、明治34年に町田坑、大正6年に住吉一坑と、東へ向けて坑口を移動させた。

以来、専用鉄道は距離数を減らしながら、昭和47年まで稼動した。その鉄道跡は所々に、橋台、橋脚、積込場の土台が残存している。いずれも鉄道建設時のものではなく、昭和時代初期に強化された際に、木橋からコンクリートへ転換されたものと考えられる。この専用鉄道と並行して内郷（現常磐）製作所一町田坑2.6kmの資材運搬用電気軌道が敷設された。宮川に架かる鉄道跡には橋台と橋脚が二つ並んでいる。一方の橋脚と橋台の規模は小さい。これは電気軌道の軌道幅が762mmと、常磐線や専用鉄道の1,067mmに比べ狭いからである。

専用鉄道の沿線には、炭鉱が厚生施設の一つとして炭鉱住宅を建設して、従業員の利便に供した。これも阿武隈高地東縁から順次東へ向けて建設された。坑口や炭鉱住宅が東進し、遅い開発炭鉱ほど施設規模が大きくなっていった。



町田坑の万石

これとともに内郷斜坑や町田坑の鉱区では大規模採炭が終了した後には系列の中規模炭鉱が、鉱区を保有者から借りて採炭をする権利となる租鉱権を設け、採炭するようになった。

これとともに、石炭積込場や選炭場などの生産施設は、磐城炭礦株を引き継いだ常磐炭礦株から、系列会社の戸部鑛業株へ貸与された。同様の措置は炭鉱

住宅、世話所などの厚生施設にも及んだが、炭鉱住宅の場合、主に職員住宅は常磐炭礦(株)の所有、鉱員住宅は払い下げ、というように分けられたカタチとなった。いずれも昭和時代初期に建設されたもので、閉山後、一部は市営住宅として活用された後、住居者が払い下げを受けて改良しながら、現在も使用している状況にある。

高坂坑付近に設けられた宮沢区炭鉱住宅は、昭和21年から23年にかけてGHQ（連合

国軍総司令部）の命を受けて建設されたものであった。昭和20年8月の敗戦に伴い、日本は連合軍の間接統治下となり、その指導によりさまざまな民主化政策が断行されたが、炭鉱労働者用の住宅確保施策もその一環として行われた。当時、石炭と鉄鋼により日本の国力を回復させようという「傾斜生産方

式」が重要な経済政策として打ち出されてお

り、それを担う炭鉱労働者の住居確保は重要

なテーマであった。その多くは市営住宅となり、改築されてアパート形式となったが、一部には、かつての炭鉱住宅が改良されて残っている。

③三星炭礦(株) (→磐城炭礦(株)→常磐炭礦(株))

専用鉄道綴線

三星炭礦(株)は綴駅南方 1km 余に綴坑を開削して、明治 41 年に専用鉄道を敷設した。綴坑は現在の常磐製作所南方に位置していた。遺構として残っているのは、三星炭礦綴坑に建設した排気竪坑である(既述参照)。

(おやけこういち)

○ 参考文献

* 常磐地方の鉱山鉄道 2009 年 おやけこういち

* 炭鉱集落の盛衰と機能 1995 年 おやけこういち